主体的にコミュニケーション活動を行う児童の育成
～アクティブラーニングを行う英語授業を通して自己肯定感を高める工夫～

味岡小学校　　保坂　　忍

１　主題設定の理由

（１）はじめに

自己肯定感とは、自分は生きる価値がある、誰かに必要とされていると、自らの価値や存在意義を肯定できる感情のことである。自分の良いところも悪いところも含めて肯定できる、前向きな感情である。自己肯定感の高い子どもは、自分に自信があり、何事にも挑戦していく強い心を持っている。また、自己肯定感があると心に余裕があり、人に優しく親切に接することができるので、多くの人が周りに集まり、支えられて生きていくことが多い傾向にあると言われる。

子どもの自己肯定感を示すアンケートに下記のようなものがある。

資料１　自己肯定感に対するアンケート

自分はダメな人間だと思うことがある		
とてもそう思う・まあそう思う	中国	５６．４パーセント
	アメリカ	４５．１パーセント
	韓国	３５．２パーセント
	日本	７２．５パーセント
	（国立青少年復興機構　２０１５年のデータ）	

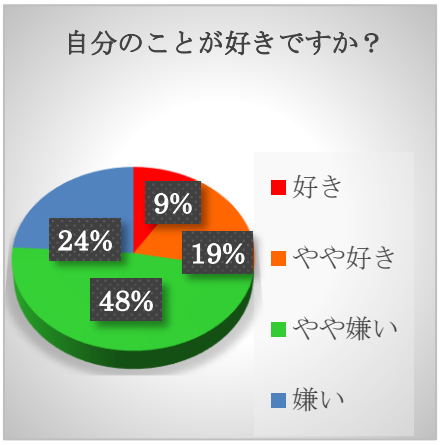
上記のデータ（資料１）でも分かる通り、日本の子どもたちの自己肯定感の低さは深刻である。一体、こんなにも自己肯定感を持てない子どもたちが、意欲を持って勉強に取り組んだり、積極的に社会のルールを守ったりできるのだろうか。また、自分を大切にできない児童が他者を大切にできるだろうか。すべての基礎、基本は、自己肯定感である。そして、学校教育では、児童にとってわかる授業、児童が学びたいと自ら意欲を高めていく必要がある。そして、学ぶ意欲を高めるためには、子どもたちの他者を尊重する心や自尊感情の育成が重要であると考える。

令和２年度より、外国語の教科化が実施され、小学校３・４年生において外国語活動、５．６年生において外国語科となった。グローバルな人材の育成が求められている今、英語教育の新たなスタートの年であった。英語でのコミュニケーション能力の育成のためには、児童が主役になる授業が必要である。その実現のためにアクティブラーニングの授業を行い、よりよいコミュニケーション活動を行う児童の育成を目指した。また、外国語教育の授業を通して、自信を育み、自己肯定感を高めることによって、自己や他人を大切にできる児童の育成ができるのではないかと考え、本研究を進めた。

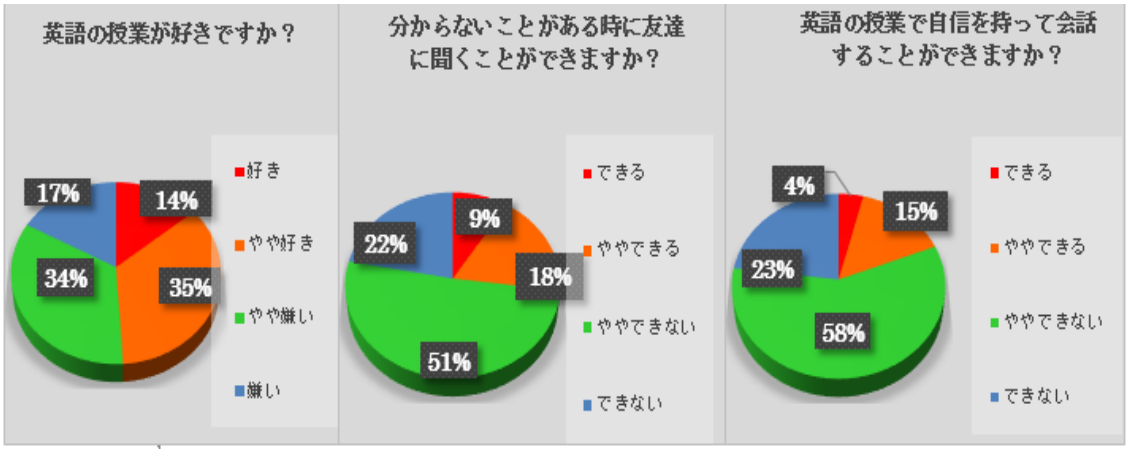
（２）　児童の実態

本実施は、第５学年１１８人を対象にしている。令和２年度４月から令和３年度６月（第６学年に進級）までを研究実施期間とした。令和２年度に行った意識調査（同年６月実施）の「自分のことが好きですか」の問いに７割の児童が嫌い、あまり好きではないを選択し（資料２）、Q-U 検査においても、「運動や勉強などでクラスの人から認められることがある」「協力したり応援したりしてくれる」の問いに、そう思わないを選択する児童が多く、自己肯定感の低さを実感した。また、外国語授業に対する質問調査（令和２年度６月実施）では、「英語の授業が好きですか」の問いに約５割の児童が「好き」「やや好き」を選択し、「英語の授業で分からないことがあると友達に聞くことができますか」の問いには、約３割の児童が「できる」「ややできる」を選択した。自信を持って会話することが「できる」「ややできる」を選択した児童は、約２割しかいなかった（資料３）。

資料２　意識調査



資料３　外国語授業に対する質問調査



授業中、「英語が話せるようになりたい人はどのくらいいますか？」の教師の問いにほぼ全員の児童が挙手したのに対して、英語が好きではない児童の割合が多い。英語が「好き」「やや好き」を選んだ児童に理由を尋ねると、「外国に行って英語が話せるといいなと思う。」「英語が通じると楽しいから。」「ゲームなどで英語を何度も言っていると簡単に覚えられるから。」「テストが簡単だし、英語は友達とたくさん話せるから。」「英会話を習っていて、得意だから。」「英語の仕事に就きたいから、頑張りたいので、英語を勉強している。授業も楽しい。」などの理由が上がり、「嫌い」「やや嫌い」を選んだ児童からは、「なぜ、日本人が英語を勉強しなければいけないか分からない。」「日本に来る人が日本語を話せばいいのに。」「会話が続かない。」「なんて言っているのか分か

らなくなると急にやる気がなくなるから。」「外国人の先生の会話が難しい。」「聞き取れないし、単語が分からない。」などの理由があった。

周りの児童とコミュニケーションを取りながら、どのように英語授業を通して自己肯定感を高めていくかが課題となった。

（３）　主題設定の理由

外国語の教育課程には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指す」とある。さらに、主体的に学ぶアクティブラーニングやそのための指導を充実させていくことが重要視されている。

英語においては、「話す、読む、書く、聞く」の基本的な思い意図を表現するための技能を習得し、主体的な学習活動をとりいれることで、自ら学び考える力ができると考える。しかし、自己肯定感が低く、自分が好きではないと思う子どもが学年に存在している中で、どうして自分の人生を主体的に、前向きに生きていくことができるのだろうか。そして、自分を大切にできないのに、周りの友達も大切にできるはずがない。自己肯定感が低い児童は、自信が無く自主性が弱い。褒められた経験が少なく、自己認識も希薄である。そこで、自己肯定感を育むために、英語の授業をどう組み立てていくか、どうしたらよいかを常に考えていく中で英語教育を通してコミュニケーション活動の楽しさ、友達との関わりの中で、自分が好きであると思う児童を増やしたい気持ちが高まった。また、相づちや反応する言葉を使うことにより、褒め合ったり、協力し合ったりして仲間と学び合う楽しさを授業により創っていくことはできないだろうか、と考えた。

２　研究の構想

（１）　めざす児童像

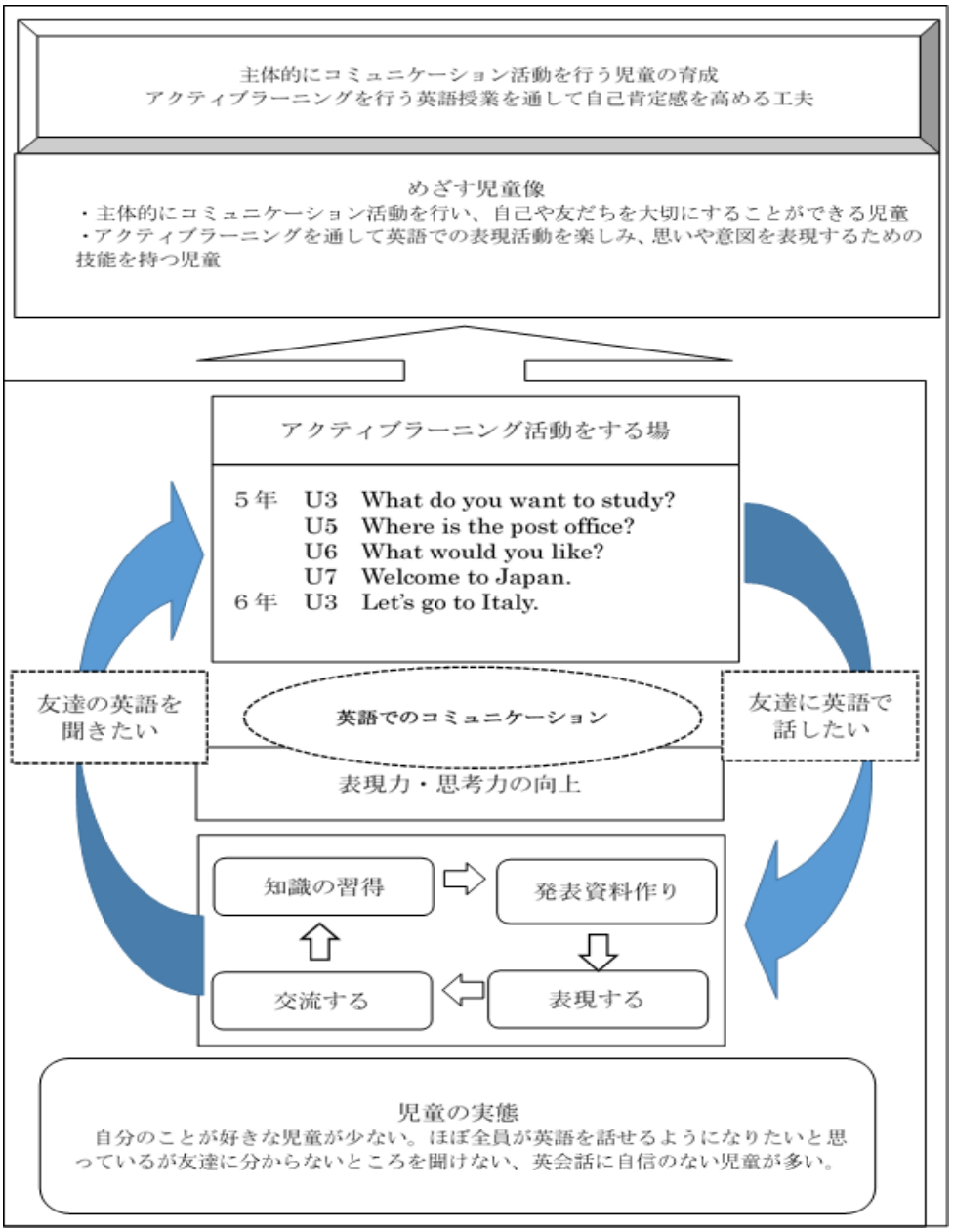
児童の実体を踏まえて、本研究でめざす児童像を以下のように設定した。

- 主体的にコミュニケーション活動を行い、自己や友達を大切にすることができる児童
- アクティブラーニングを通して英語授業を楽しみ、思いや意図を表現するための技能を持つ児童

（２）　使用する言葉の定義づけ

「主体的にコミュニケーション活動をする」とは、英語の授業に自分のめあてや見通しを持って取り組み、さらに自ら進んで友達とコミュニケーションをとろうとする態度とする。

資料４　研究の構想



（３）研究の仮説

めざす児童像と研究の構想から、次のような仮説を設定した。

仮説１　アクティブラーニングの活動において、友達との関わりを意図的に設定すれば、友達から学んだことを生かして、児童は主体的に学習に取り組むだろう。

仮説２　英語の授業で自信をつけることができれば、子どもの自己肯定感が高まり自己や友達を大切にすることができるだろう。

（４）研究仮説に対する具体的な手立て

①　自然と英語で会話が続く場面設定と相手へのリアクションの言葉を使うことによる会話が続く工夫

② 授業支援ツールで提出された課題への添削と励ましのコメントの記入や、振り返りシートへの一言アドバイスの記入。また、スモールトークで互いに認め、褒め合う活動

（５）研究構想図

研究構想図を資料４に示した。

（６）仮説の検証方法

① 授業の振り返り、質問調査の変容、会話の様子

② Q-U 検査、質問調査の変容、クラスや授業時の児童の表情や言動

（７）抽出児童について

資料５のように、上位、中位、下位の３人の児童を抽出した。

資料５ 抽出児童について 令和２年度６月実施

	児童の実態	授業調査アンケート	Q-U テストによる自己肯定感
上位児童Ａ	・成績は非常に良い。リーダータイプだが、少々自分勝手。周りの友達に教えるのが苦手。コミュニケーションがやや苦手な傾向があるが、友達は多い。	英語の授業は、楽しいです。会話が続くようになりたいです。単語をたくさん覚えてがんばります。	・やや低い クラスの人から認められることがあるとは思わない。クラスの人が協力したり応援したりしているとは、やや思わない。
中位児童Ｂ	・やりたいことは、やる。やりたくないことは、全くやらない。教科書のリスニングが苦手だが、テストの成績はよい。友達とのコミュニケーションがやや苦手。	英語は好きだけれど、リスニングが難しい。インタビューしたりするのは楽しかったです。	・低い クラスの人から認められることがあるとは全く思わない。クラスの人が協力したり応援したりしているとは、思わない。
下位児童Ｃ	・すべてのことに対してやる気がない。友達が少ない。	えい語はつまらん。	・低い 自分や他人のことが好きではない。

３ 研究の実際と考察

（１） 仮説検証単元Ｉ U5 Where is the post office?

① 単元について

目標 ・ 場所を尋ねたり、答えたりする語句や表現を身につけることができる。

・ 場所を尋ねたり、答えたりする目的や場面、状況などに応じて、学習した語句や表現を選択したり付け加えたりして、尋ねたり、答えたりすることができる。

・ 他者に配慮しながら、主体的に場所を尋ねたり、答えたりしようとする。

② 授業実践 手立て①自然と英語で会話が続く場面設定

教室の床に、ガムテープで碁盤の目状に道を作り（写真１）、その空間で授業を

することにより、児童が場をイメージしながら、進んで会話をしたくなる場を設定する（写真２）。

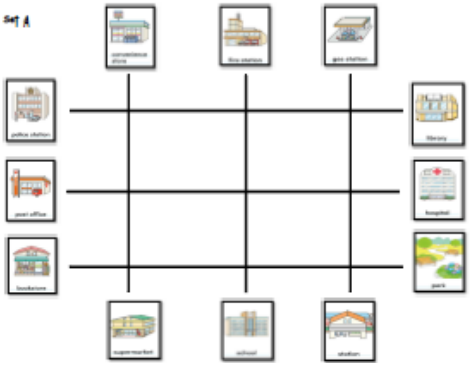
写真１　教室の様子

写真２　授業の全体の様子

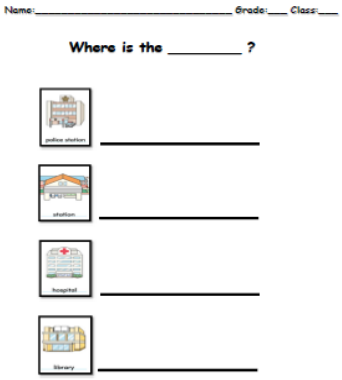
ワークシートＡ（資料６）を持つ児童（グループＡ）とのワークシートＢを持つ児童（グループＢ）に分けて、Ｂグループ児童がそれぞれ順番に行きたい場所「Where is the～？」と聞く。Ｂグループのワークシートは全員違うパターンを持つ。グループＢの児童は、行き方を英語で教えてもらい、１マス進むごとに、「Go straight.」「Turn right.」「Turn left.」と言いながら進む。目的地に着いたら、「Is this the～？」と場所を確認し、「Yes」と言われれば、サインをもらう。「No」の時は、戻って、もう一度やり直す。この活動を繰り返し、サインを４つもらったら終わる。

資料６　ワークシート

ワークシートＡ



ワークシートＢ



③　結果と考察

ア　仮説①について

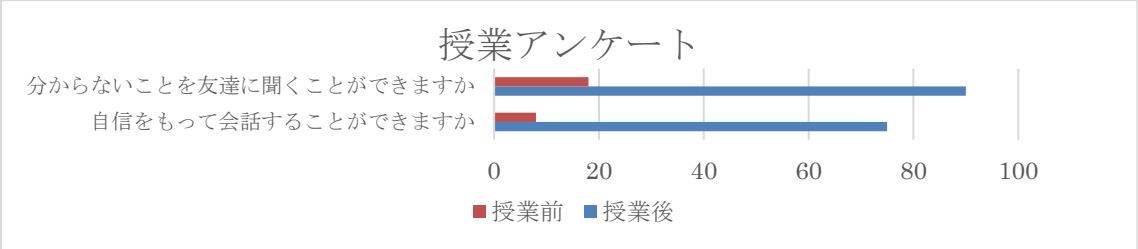
児童の振り返りシートより、児童Ａ「今日の授業は、何回も会話しているうちに自然に覚えることができました。友達と英語で会話をしてミッションをクリアして、楽しかった。またやりたい。」児童Ｂ「友達と英語を話すことはとても楽しかったし、楽しく勉強ができました。」また、下位児童Ｃについても、「今日のえいごは、めちゃくちゃおもしろかった。またみんなと話して、道あんないをしたい。」と書かれていた。これらの感想からも分かるように、サインをもらいながらゴールをするワクワクできるゲームのような工夫があれば、自然と会話を続かせたい、もっと友達の会話を聞いて、話したいと感じ、主体的に活動するようになることが分

かった。

イ　仮説②について

英語を使うことによってどのような変化がおきたか、授業アンケート（資料７）により明確に結果が出た。友達と関わることにより、自信がつくことが分かった。

資料７　授業アンケート



（２）　仮説検証単元Ⅱ　U6　What would you like?

①　単元について

目標　・　ていねいに注文したり、値段を尋ねたりする表現を身に付けることができる。

・　ていねいに注文したり、値段を尋ねたりする目的や場面、状況などに応じて、学習した語句や表現を選択したり付け加えたりして、尋ねたり、答えたりすることができる。

・　他者に配慮しながら、主体的に注文したり、値段を尋ねたりしようとする。

②　授業実践

お買い物ごっこをする。進め方は、７ヶ国（アメリカ、フランス、インド、オーストラリア、トルコ、カナダ、中国）の中から好きな国を選び、それぞれの班で国の有名料理を調べ、売りたい商品を英語で説明する（資料８）。英文は、教師がアドバイスをしながら、考えて暗記する。クラス全体をお店の人とお客さんに半分に分ける。「What　would　you　like？」とお店の人が聞き、お客さんは「I　don't　know.」と答え、その後お店の店員役は考えた英文で説明をする。そして、改めて、「What's would　you　like？」と聞き、お客さんは、欲しい物を一つ選び、お金と商品を交換する（写真３）。

資料８　おすすめの商品

France
● Bonjour! - こんにちは。
● What would you like?
This is escargot.
They are snails.
It has garlic and herbs.
This is French cheese.
There are many kinds of cheese.
It is delicious.
These are macarons.
It is made from egg whites and sugar.
It is very, very, very yummy.

写真３　授業の様子

③　結果と考察

ア　仮説①について

友達同士の会話が弾むように、お買い物ごっこという場を設定することによって、互いに協力しあい、全く英語ができなかった児童からも、「分かないから、教えて。」などの言葉が聞こえてきた。また、英語が得意な児童も、グループのレベルに合わせて、「大丈夫？」「発音分かる？」など友達を気にする様子が見られた。これらの結果から、教師が教えこむよりも、友達から学ぶ授業の方が自然と英会話へと結びつき、もっと知りたい、学びたいという意欲が見られる結果となった。

イ　仮説②について

友達同士で褒め合うだけでなく、教師からも、褒めている児童へ「そんなふうに、友達のよいところを見つけられる〇〇くんが、とてもすごいなって思うよ。」など皆の前で褒めた。友達同士が関わる場面を設定することにより前回よりも、自己や他人を大切に考えることができた。これらの結果、良いところを見つけ教師や友達が褒めることにより、英会話だけでなく自分にも自信が持てて、「分かった、できた、楽しい。」となる授業になることが分かった。

（３）　仮説授業単元Ⅲ　U3　Let’s go to Italy.

①　単元について

目標　・　行ってみたい国や地域と、その理由を説明する語彙や表現を身に付けることができる。

・　行ってみたい国や地域と、その理由を説明する目的や場面、状況などに応じて、学習した語彙や表現を選択したり付け加えたりして、説明することができる。

・　他者に配慮しながら、主体的に、行ってみたい国や地域と、その理由を説明しようとする。

②　授業実践

興味のある外国を３つ選んで、発表資料を作成する。例文集（資料９）を参考にしながら、授業中毎回１０分は、発表資料作りを取り入れ、学習支援ツールで作成する。早くできた児童には、ワークシート（資料１０）を配り、会話練習も行う。その際、レスポンスの言葉をいくつか教え、会話に反応することの大切さを伝えた。

資料９　参考資料

1. This is India.
You can eat curry and nan.
You can see the Taj Mahal.
It's beautiful!

2. This is Singapore.
You can visit Gardens by the Bay.
You can see the Merlion statue.
It's amazing!

3. This is Egypt.
You can see the pyramids.
You can try riding a camel.
It's fun!

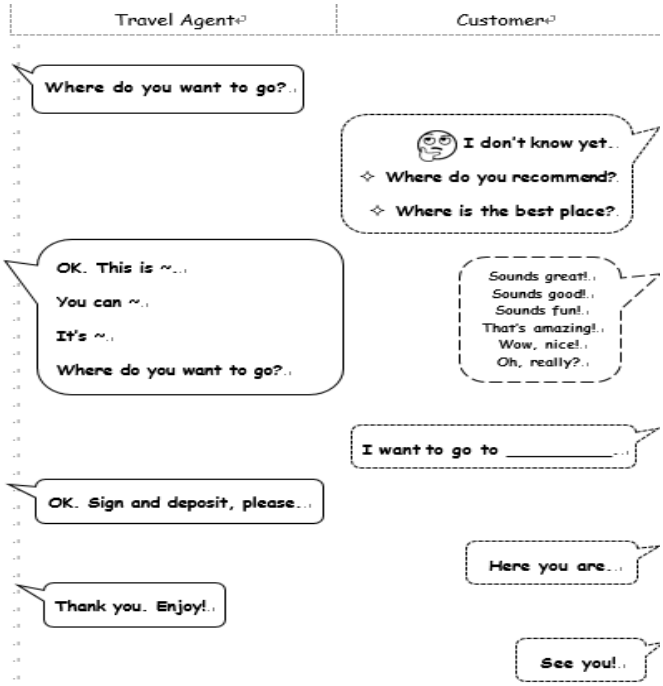
6. This is China.
You can eat *anninofu*.
You can see the Great Wall of China.
It's wonderful!

7. This is Saudi Arabia.
You can go desert camping.
You can try sand boarding, too.
It's cool!

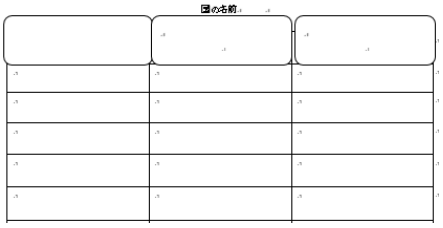
8. This is Thailand.
You can visit the floating market.
You can eat tom yum kung.
It's spicy but delicious.

国	有名な場所・食べ物など	
Canada	➢ Ice hockey ➢ Aurora ➢ Poutine（食べ物）	アイスホッケー オーロラ プーティン
Australia	➢ Gold Coast（場所） ➢ Sheep farms（場所）	ゴールド　コースト シープ　ファルム
Switzerland	➢ Matterhorn（山岳） ➢ Cheese fondue（食べ物）	マターホルン チーズ　フォンドウ
Sweden	➢ Gotland（場所） ➢ Arctic Hotel（場所）	ゴットランド アークティック　ホテル
Brazil	➢ Amazon River（場所） ➢ soccer	アマゾン　リバー サッカー
Ghana	➢ Cocoa beans ➢ *fufu*（食べ物）	カカオ　ビンス フフ
Saudi Arabia	➢ desert camping ➢ sand surfing	デザートキャンプ サンドサーフィン
South Africa	➢ safari（場所） ➢ shark cage diving	サファリ シャークケープダイビング
Singapore	➢ Gardens by the Bay（場所） ➢ Marina Bay Sands（場所）	ガーデンズ　バイ　ザ　ベイ マリナ　ベイ　サンズ
Korea	➢ bibimbap（食べ物） ➢ Jeju island（場所）	ビビンバ ジェジュ　アイランド

資料１０　ワークシート・レスポンスワード



Sounds great!	Sounds fun!
That's amazing!	Wow, nice!
That's good!	Really?



③　結果と考察

ア　仮説①について

児童の振り返り（資料１１）からも、コミュニケーションが少しずつできるようになってきたことが分かった。児童が互いに、英語を話す時間を十分にとっていくことによって、自信をもって、英語を話し、友達に伝えようとする姿勢がみられた。３つの国を紹介しながら、レスポンスの言葉をいれるように指導したところ、教師同士のスモールトークからも、きれいな景色を見て、「beautiful」「great」などの言葉が自然と出てきた（写真４）。中には、「It's　amazing.」などの難しい言葉も出てきた。それを友達へも応用して使うように指導したところ、一人ひとりの発表に対して、必ず英語で褒める言葉を言えるようになった。「黙ってただうなずくよりも、褒めあう方が気持ちが伝わるね。」「誰かが聞いててくれると、もっと話したくなるね。」などというつぶやきも聞こえた。また、第６時までの抽出児童の様子からも、自分で発表資料を作り上げていくことや友達との関わりにより、自信を持ち、主体的に学習している様子が分かる。特に、児童Ｃの第３時からの変容が大きかった（資料１２）。

また、クラスみんなで毎朝英語の歌を歌った。授業時も教科書の英語だけでなく、いろいろな英語をアレンジして歌にして歌った。耳から慣れて覚えていくことが、とても速く上達する秘決であると感じた。歌を歌うことは、個人の活動のようであるが、友達同士の関わりが大切な活動であると実感した。友達に発表する時も自信を持って、相手の目を見ながら英語を話すことができた（写真５）。

資料１１　振り返り

	児童Ａ	児童Ｂ	児童Ｃ
振り返り	今日の授業は、何回も練習したので、堂々と発表できたし、お客さんがたくさんきてくれた。目を見て言えた。	練習をすれば、話せることが分かった。たくさん会話ができたので楽しかった。また旅行会社ごっこをしたい。	まちがえないで言えたので、とてもよかったです。みんながほめてくれたのでうれしかったです。

資料１２　抽出児童の様子

第６学年　Unit３　　Let’s go to Italy.			
時	児童Ａ	児童Ｂ	児童Ｃ
1	おすすめの国を決め、発表資料の作成に取り掛かる。	発表する国の候補をいくつか出して、３つに絞る。	タブレットを開いて、検索をする。
2	３ つの国の発表資料完成。添削後、練習をする。	１つの国の発表資料の完成添削を受ける。	前半、分からないと言って、何もしない。後半は、友達に教えてもらい少し進む。
3 4 5	３つの発表資料に付け加えて、長い英作文を作る。 他の友達にやり方を教える。「分からないことは、何度も聞いてね。」など友達に言っていた。	教師や友達に聞きながら、２つの国の発表資料を完成させる。練習相手を探し、自ら話しながら、練習をする。	１つの国の発表資料を完成させる。その後、教師と個別に２つ作成し練習をする。何度も練習をするうちに、「もう少し頑張りたい。」などの言葉が聞かれ、積極的に練習を行うようになった。
6	はじめから、自信を持って、発表を行う。	１，２回目は自信がない様子だったが、７人目には相手の目を見て発表ができた。	教師の助けを得ることなく、自分の力で発表をしようとする。友達に堂々とした態度で話す。

写真４　スモールトーク

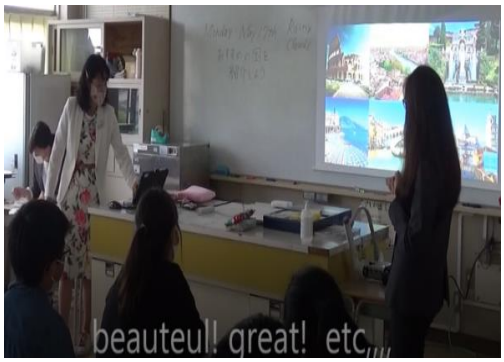


写真５　授業の様子

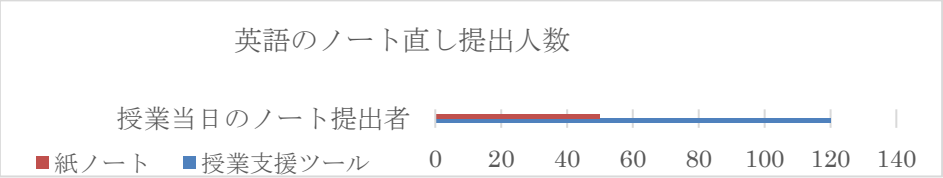
イ　仮説②について

写真６　授業支援ツールでの添削

学習支援ツールで児童が英文を作る時に、文法の間違いを何度も直して送る。児童は新しい文章を作成して送り返す作業を何十回と繰り返した（写真６）。朱で間違いを入れるだけでなく、アドバイスやできたこと、児童を励ました文章なども添付した。具体的には、「great」「Good job.」「Keep going.その調子」など英語も交えて毎回送った。ノートで返却しても、直しや再提出がなかなか進まなかった児童が見違えるほど早くに自分で直して授業支援ツールを用いて教師に再提出するようになった（資料１３）。「授業支援ツールで先生がすぐに直して返却してくれて、ぼくがまた送る。先生から、『期待しているよ。』と書かれていてうれしかった。」などの振り返りがあった。

ICT を効果的に活用しながら、教師が児童をきちんと見て、心を込めて指導をすれば、児童の英語の表現力や思考力は高まり、「英語で説明できるようになった。」という達成感を児童は味わうことができる。それが「ぼくでもやればできる。」という自信につながり、その「できた。」の積み重ねが児童の自己肯定感を高めることにつながると感じた。

資料１３　英語のノート直し提出人数



４　研究の成果と今後の課題

（１）　成果

仮説１	アクティブラーニングの活動において、友達との関わりを意図的に設定すれば、友達から学んだことを生かして、児童は主体的に学習に取り組むだろう。

アクティブラーニングでの友達との関わり合い、互いに認め、褒め合う授業は、互いに学び合い、意義のあるものであった。互いに認め、褒め合うことでお互いの良いところを知り、それが子ども同士が認め合うことにつながり学級に安心感が生まれた。安心感が生まれることで、学習にも意欲的に取り組めるようになった。また、子どもの力も借りて、授業中に学習に取り組めなくなってしまう児童がいなくなっていった。「授業が楽しい。」「また、みんなで英語で話し合いたい。」といった言葉が聞かれるようになった。また、抽出児童の変容についても、大きな変化があり、自信を持って取り組めるようになった（資料１４）。

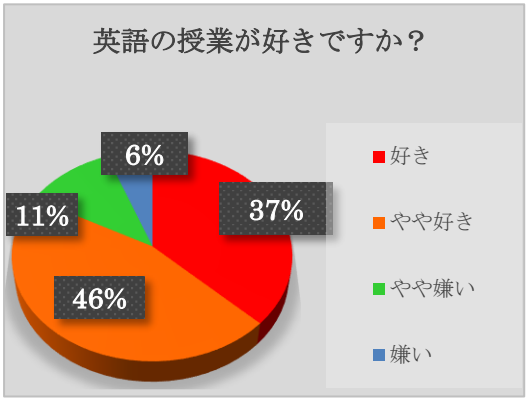
また、「英語の授業が好きですか？」の問いに、「やや嫌い」「嫌い」を選択する児童が減り、「好き」「やや好き」を選択する児童が増えた。授業に対しても、楽しく主体的に参加する様子が見られた（資料１５）。

資料１４　抽出児童について　意識調査･質問調査の変容　令和３年度６月実施

	自分のことが好きですか？	英語の授業が好きですか？	分からないことがあるとき友達に聞くことができますか？	英語の授業で自信を持って会話することができますか？
抽出児童Ａ	Ｃ→Ａ	Ｂ→Ａ	Ａ→Ａ	Ｂ→Ａ
抽出児童Ｂ	Ｃ→Ａ	Ｃ→Ｂ	Ｂ→Ａ	Ｃ→Ｂ
抽出児童Ｃ	Ｄ→Ｂ	Ｄ→Ａ	Ｄ→Ｂ	Ｄ→Ｂ

Ａ思う　Ｂやや思う　Ｃやや思わない　Ｄ思わない

資料１５　外国語授業に対する質問調査　令和３年度６月実施



仮説２　英語の授業で自信をつけることができれば、子どもの自己肯定感が高まり自己や友達を大切にすることができるだろう。

これらの実践の後、児童への意識調査に以下のような変化が見られた（資料１６）。「自分のことが好きですか？」の質問に「好き」「やや好き」と答えた児童は、約３割から、少し増えたことが分かる。「英語の授業が好きですか」の質問は、Ｒ３.６月には８割以上の児童が「好き」「やや好き」を選択し、大きな変化が見られた。

資料１６　令和２年度６月と令和３年度６月実施の意識・質問調査結果の比較

意識調査・授業に対する質問調査の比較	Ｒ２．６月	Ｒ３．６月
自分のことが好きですか　　好き・やや好き	２８％	３９％
英語の授業が好きですか　　好き・やや好き	４９％	８３％

抽出児童については、特に児童Ｃの変容が大きく自信をもって堂々と生活を送り友達との関係も良くなった。また、「分からないことがあるときに友達に聞くことができますか？」の問いに、全ての抽出児童に良い変化が見られた（資料１４）。

自信をつけるために、褒めることを教師だけでなく、友達同士でさせたことがよい結果に結びついた。教師が教える手立てをしっかり立てて、個別指導も何度も行い、授業支援ツールでのやり取りも頻繁に行った結果、英語に対しての不安などが無くなっていった児童が増えた。また、授業中には、できるようになったことや英語を通して成長したことをできるだけ具体的に直接児童に伝え、授業支援ツールでの添削に合わせて、「あなたならできる。」「大丈夫だよ。」「がんばっているね。」などのコメントを書き続けた。それらの結果、「分かった。」から「できた。」そして、「英語は楽しい。」という言葉が聞かれるようになった。英語によるコミュニケーションに自信を持てるようになったことで、自己肯定感も高まっていったと感じた。

（２） 課題

これらの実践を経て、児童は、楽しく英語を勉強していくうちに、もっと知りたい話したいという学習意欲の向上心が見られた。しかしながら、授業時には言えることができた単語や会話も実生活においてはすぐに言葉が出てこず、諦めてしまう児童も一定数いる。英語に自信がなく「どうせできない。」という気持ちから、堂々と自信を持って、「挑戦してみよう。」という気持ちになるように、コミュニケーションを大切にしたり、英語をより身近に感じる環境を用意したりしたい。そして、より英語が楽しい、英語が分かると児童が感じる授業を実践していきたい。また、これからも子どもの可能性を信じて、英語の魅力や楽しさを伝え続けたい。

【参考文献】

（１）　文部科学省（２０１７）「小学校外国語活動、外国語研修ガイドブック」

（２）　明橋大二（２０１０）子育てハッピーアドバイス　大好きが伝わる　ほめ方・叱り方　１万年堂出版